



第74号 (年4回発行) 編集発行 弘前学院大学 前学委員 弘報 印刷所 (有)小野印刷所

韓国、安養大学校と協定を結ぶ

学長 吉岡 利忠



2018年(平成30年)11月26日(月)に大韓キリスト学園安養大学校と本学と協定を締結しました。1948年創立の安養大学校はソウル市から北西約50キロにある人口62万の安養市にある大学で、学生数は6,600人の総合大学で、学部には、神学、人文、社会、理工、音楽、教養があり、近い将来、日本語学の開設をめざしています。総長は柳錫成先生であり、本学は2014年3月にソウル神学大学校と提携しましたがその時の総長でありまし

た。柳総長は本学を2014年に訪問しています。協定書の内容は、①現地学習を目的とした交換留学生派遣、②短期語学研修のプログラム、③客員教授、④出版物、教材及び学問的な資料の交換、⑤協同研究計画、⑥その他、随時、両校において有益と考えられることができる諸企画の実施、であります。これを機会に本学の学生、教職員の交流が活発になればと考えています。

学術交流を結んでいる海外の機関としては中国の山東大学など、台湾、アメリカではペンシルバニア大学、ポートランド州立大学など、ロシアのサンクトペテルブルク大学などでありま

が、弘前学院大学は日本の大学として最初の提携校でした。これでは本学は韓国にある5つの大学校と提携を結ぶことになりま

した。本提携は本学の宗教主任楊尚眞教授の協力によってなされたものです。

このたび弘前市と弘前学院大学との連携協定事業のひとつとして「hug work サテライト事業」をオープンしました。hug workとは、2017年10月より、弘前市内の障がい者就労支援事業所の9事業所が、弘前市役所1階ロビー(旧市民課前)で週2回パン、お菓子、木工等を製造・販売しているアンテナショップです。

今年度は、1月30日まで実施予定としております。今後も、継続は力なりで、地道にコツコツ



中長期目標実施計画の確立・実践に向けて

学校法人弘前学院 理事長・学院長 阿保 邦弘



八 「大学教育再考」

「段差」

間もなく元号が変わろうとしている。平成を振り返りながら、大学と社会の関係について再度整理してみよう。

教育機関と社会の間には様々な問題が存在している。その中でも特筆すべきは、目まぐるしい社会の変化に伴って、お互いの接続がスムーズにいかなくなったことである。

大学と社会の段差は以前にもあったが、それほど大きなものではなかった。例えば、会社であれば入社後に企業内教育を施せば埋めることができる程度のものであった。ところが、定型業務の機械化、

この状況を受けて、大学から学生を受け入れる側では、教育と社会の断絶に強い危機感を覚えるようになった。

それはチームで働く力やリーダーシップ、新しいものを生み出す力や学び続ける力である。特に、学び続けるマインドは人生百年時代を迎えた今こそ必要不可欠な力と言える。なぜなら、この時代同じ職場

に定年まで勤めることは難しい。新しい組織で別の仕事をはじめめる可能性が高くなっているのである。

以前には、社会に出てから職場が設けていた機会を、前倒しして大学でも提供することが求められるようになったのである。

そこでは、複雑に変化する社会に對して、大学はどのように対処していったらよいのか。

答えは、社会で働く際に必用となる力を、学生たちに身に付けさせるための経験を提供することである。

ところが、大学等の学校での成績と社会の求める力の間に溝があり、社会の変化に教育がついていけない時代になった。

近年、全国の大学は非常に厳しい状況に置かれている。各地域の人口に比して大学の数が多すぎるのである。

加えて、どのような学生を育てるのかという視点は、当然忘れてはならない観点である。

大学は小さくても、地域に根ざしながら、目標に対して明確にターゲットを絞って自らの歩みを進めたい。

2018年度 弘前学院大学学位記授与式

文学部 第45回
 社会福祉学部 第17回
 看護学部 第11回
 大学院社会福祉学研究科修士課程 第15回
 大学院文学部研究科修士課程 第13回

◇日時：2019年3月16日(土) 午前10時～
 ◇場所：弘前学院大学体育館

卒業記念礼拝

◇日時：2019年3月15日(金) 午前10時～
 ◇場所：礼拝堂

*礼拝終了後、体育館において学位記授与式のリハーサルを行う。

hiroasaki universal gift
HIROGAKU

hug work 事業担当
社会福祉学部 教授 葛西久志

弘前学院大学での hug work サテライト事業は、週2回水・金曜日11:50~12:40まで、ラウンジ並びに看護学部棟学生ホールにて、パン・お菓子・木工などを販売しています。

事業の主な目的は、学生がボランティアとしてかかわりながら、障がい者および障がい者雇用への理解を深めながら啓発活動の一環として取り組むことです。

今年度は、1月30日まで実施予定としております。今後も、継続は力なりで、地道にコツコツと継続していきますので、何卒よろしくご願ひ申し上げます。なお、地域の方々もご利用できますので、是非お立ち寄りください。お待ちしております。

談話室

自他の能力の練磨

社会福祉学部 社会福祉学科 教授 西東 克介



私の専門は政治学だ。少し絞ると行政学、もっと絞ると教育行政学。本学で、私は学生が教員資格を取るための教職課程・教職に関する科目で「生徒指導論・進路指導論(旧生徒指導論)」と「特別活動及び総合的な学習の時間指導法・(旧特別活動の研究)」を教える。この2つの科目は、教える専門科目がいずれであっても取らねばならない。4月から科目名が変更される。私の旧生徒指導論には、進路指導論を含めていた。「生徒指導論・進路指導論」となったのは、キャリア教育という考え方が、すでに小学校から地域の仕事場見学などにより実践されている。大学では、専門職を目指す学生が変えられる。私の旧生徒指導論には、進路指導論を含めていた。

総合的な学習は、新たな特別活動の研究に加えられた。この総合的な学習とキャリア教育(進路指導論)は、密接に関連している。特別活動も加えると、この3つの学習のポイントが、自主性による自律性を学ぶ、コミュニケーションによる他人との違いや共通点を学ぶ(協働。共同ではない)、理想と現実のズレから自らの未来を考える、などである。

文部省(現文部科学省)は、20年以上前から学力一辺倒の考え方は止めていくとみていい。学力を捨てたわけではない。しかし、学力だけでは、日本社会のあらゆる職種、社会活動のレベルがこれ

第14回看護学部リカレント教育を終えて

看護学部 教授 大瀬富士子

平成30年度リカレント教育は盛会のうちに終了することができました。リカレント教育は基礎教育終了後、生涯にわたり教育と他のから低下していくとの見方で行われていた。一つの例を紹介する。ラ

諸活動を交互に行う教育システムといわれています。本学では看護学部の開設以来、地域貢献のひとつとして看護師などが、教育機関を利用して学習する機会として行ってきました。

教育プログラムは現場の看護職の希望が「看護研究」にあることから、看護研究を中心に行っています。リカレント教育を開催した半年のイギリス留学から帰ってきた平尾誠二であった。チームスポーツなので集団練習は欠かせないが、一人ひとりが強い部分と弱い部分を強化していくのである。これが協働である。全体としても平尾が提案した練習時間は短かったそうだが、非常に疲れたそうである。肉体的にはなく、精神的には、動きながら常に考え判断する能力を磨いているからである。新時代の能力は、実践しつつ個別の判断能力の練磨が求められる。方もおられました。

第4回キリスト教看護教育推進会議本学で開催

学長 吉岡 利忠

昨年度のキリスト教看護教育推進会議第106回定時総会で「第4回キリスト教看護教育推進会議」が本学で開催することが承認されました。2018年(平成30年)11月17日(土曜日)の当日は折尾愛真高等学校、福岡女学院看護大学、同志社女子大学、梅花女子大

学、聖隷クリストファー大学、聖路加国際大学から教員と、同盟の事務局長、本学の教職員を加え総勢30名が集まりました。開会礼拝、ハンドベル演奏に続き、本会議の発題「キリスト教を背景にした看護学学生に必要なコミュニケーション」として学長の講演があり、その後、看護棟に移動し二つのグループに分かれ「キリスト教学校における看護教育とは何か」と題してディスカッションが行われた(詳細は本同盟の機関紙「キリスト教学校」2019年1月号を参照)。会議終了後に情報交換会が開催されました。

国公私立の看護教育高等機関はここ数年で260か所以上となり、ほぼ3大学に1つに看護学部・看護学があることになりました。その中でキリスト教学校教育同盟(104校)に加入している看護教育機関は16校を数えます。本会議は記念すべき第1回が2015年11月に同志社女子大学看護学部において開催され、聖路加国際大学看護学部で第2回、福岡女学院看護学部で第3回が開催されました。今回の第5回は梅花女子大学が担当することになりました。



神を畏れ命を尊ぶ愛を持って他者に尽くすキリスト教の教えは正しく看護教育の精神にも通じるものであり、無数の処理の中からなぜかその一部を選んでしまう自分自身を対象化することもできるからだ。選んでしまう自分(たち)を語るというところ、それはつまり「作家」という存在に興味のない者が、実存を語る場所にとり着いた、ということなのだろうか。それはともかく、「作家には一切の興味がない」とまでナマなことは、最近では言わなくなった。



のであり、そのことはそれぞれの看護教育機関の3つのポリシーに如実に表現されています。看護教育こそキリスト教が基盤となっており、その後に看護学が加えられてきたという見方です。看護教育は豊かな知識や優れた技能だけでなく、悩める人たちに対してよい実習や看護ケアはできません。温かい人間性、すなわちキリスト教的愛の精神が揃ってこそ心温まる看護ができるというものです。「いのちの時間に流れに寄り添い、共に生きる」、「病気を診ずして病人を診よ」の精神は全人的医療の神髄であり、広く保健医療福祉に携わるヘルス・プロフェSSIONナルとして必要な姿勢でありましょう。本会議に参加した教職員によってキリスト教学校における看護教育をさらに充実し確認し合い、看護教員・看護学生・職員によって多くの情報を交換する素晴らしい機会であったと考えております。

図らずも紙面をいただいたので、来歴がたがた、自分の研究を紹介してみたい。

学部から大学院を通じて、主に近代・現代の小説を研究対象にした。卒論・修論の対象にしたのは、作家名で言えば芥川龍之介であるが、私は作家個人には当時も今もほとんど興味がない。興味があったのは、小説の作り方あるいはこわし方(それまでの小説概念を超えるような、全く新しい方法論であった。そういう観点から見ると

と、例えば芥川龍之介は怪奇小説の作家に、夏目漱石は推理小説作家にも見えたりするし、太宰治の最高傑作は「満願」か「女生徒」ということになったりするのだ。今でこそ、こういう言い方は世の中で割と通ると思うが、当時はかなり奇矯な説に見えたものと思う。研究を始めた頃、私の考え方のベースになったのは、いわゆる「受容理論(あるいは「作用美学」「読者中心の理論」ともいう)だった。その後、ポストモダンの理論の影響を受けてもいると思う。やがて対象作家は谷崎潤一郎や太宰治、久生十蘭、江戸川乱歩といったところに拡大していくが、私の関心は常に「小説の方

法」というところにあった。(余談だが、久生十蘭は、どういう観点から見てもうすごい作家なのである。本学図書館に全集があるからぜひ一読してほしい)一方、同じパーメディアへの興味として同時進行していたのが、マンガへの注目である。手塚治虫や水木しげる、白土三平などもたくさん読んだのだが、もっとも心引かれたのは石ノ森章太郎の少年時代にはまだ「石森」だった。だから、これまでの生涯を通じて、ベストワンのマンガ作品を挙げてと言われれば、それは「サイボーグ009 天使編」である。小説は図書館で借りることができ、私が貧乏学生だった頃は、また社会の理解が浅く、漫画を配架している図書館などなかった。でも、もっぱら立ち読みと自分の記憶力に頼っていた。どういうわけかマンガだけは、ページ(面

をほぼそっくり記憶することができたのだ。実は学部生の頃から、将来はマンガについてコメントしたいとは思っていた。といって、時代の先頭に立ってマンガ批評をするということでもなかった。が、とにかく少し時間が過ぎて、現在ではマンガ研究も立派に(研究領域として認められるようになってきたのは、実にうれしいことである。

そういうわけで、現在の私の研究は、パーメディアについて小説(ライトノベルなども含む)とマンガが二本の柱という感じになっている。その中心は、やはりそれぞれのジャンルにおける「方法」の研究ということにあるのだが、あえて絞り込めばネット環境における「集合知」としての読解のありよう、「私」という一読者における読書行為の一回性とその読み方にたどり着くということ

「第七回就活祭」報告

文学部・社会福祉学部四年生の就職内定者による就職活動報告会「第七回就活祭」を、平成三十一年一月十七日に実施し、今回は、公務、教育・学習支援業、サービス業、卸売業・小売業、金融業・保険業、医療・福祉といった業種・職種に就職が内定した英語・英米文学科七名、日本語・日本文学科八名、社会福祉学科五名の報告がされた。参加者は英語・英米文学科三年生八名、一年生五名、日本語・日本文学科三年生二十名、二年生一名、一年生二名、社会福祉学科三年生十三名の合計四十九名だった。また、例年にはない一年生、二年生の参加があり、就職への関心の高さを感じた。(就職課)

文学部日本語・日本文学教科教育活性化事業 ―被災地・石巻と石ノ森章太郎の地をたずねて―

文学部 日本語・日本文学教科 教授 鎌田 学

平成30年11月17日(土)、18日(日)、在学生15名と教員3名が、東日本大震災の被災地石巻市と石ノ森章太郎ゆかりの地を訪れた。これは学科学活性化事業と国語国文学会「文学散歩」とのジョイント企画として実施されたものである。初日に、芭蕉ほかあまたの文人が立ち寄った日和山公園に登った。ここは、東日本大震災の折、多くの市民が避難した高台で、震災のシンボルのひとつである。参加者全員で黙祷を捧げた。また、当時、避難所となった日蓮宗神明山法音寺では谷川住職のご厚意で、被災された多数の方々へ学生

「文学散歩」で石ノ森章太郎を知る

文学部 日本語・日本文学教科三年 三上 真澄

「文学散歩」石巻市と石ノ森章太郎を巡る」と題して、宮城県石巻市に一日二日の旅行に参加した。この旅では「仮面ライダー」の生みの親である石ノ森章太郎について何か知ることができた。いなと思いつながら参加した。石ノ森萬画館では、主に石ノ森章太郎がつくったキャラクターについて、石ノ森章太郎ふるさと記念館では主に石ノ森章太郎がつくったキャラクターの遍歴と作家人生について、生家では、幼少期の石ノ森章太郎のことやその生涯について展示していた。

この旅では私は石ノ森章太郎がたくさんの人々に愛されていたのだと感じた。そうでなかったら、石ノ森章太郎についての施設がいくつもつくられはしないであろう。今でもたくさんの人に愛されるキャラクターを遺す石ノ森章太郎の才能が素晴らしいと感じた。「文学散歩」であった。

被災体験をお聞きして

日本語・日本文学教科二年 三上純三郎

十八日の朝、宮城県石巻市にある法音寺を訪れました。渡波の高台にあり、石巻市内や太平洋カキの養殖いかなが浮かぶ穏やかな内湾などが一望できました。2011年3月11日の東日本大震災から、多くの人が避難された場所の一つです。

住職の谷川さんから、震災の際に経験された大きなことを教えてくださいました。「自助」「共助」「公助」の三つです。最後の「公助」を受けられるまでには数日かかってしまうので、それまでの「自

震災体験をお聞きして

日本語・日本文学教科一年 高橋 敦史

私は、法音寺で、被災されたAさん(女性)とお話をさせていただきました。東日本大震災の際の被害の様子や避難生活について、実際にそのようなことを経験された方からお話を聞くというよりは、テレビやインターネットなどのニュースからは得られない、貴重なものがありました。

まず私は、震災が起こった際の避難についてお伺いしました。Aさんのお宅は法音寺から見て、橋の向こう側にあるため、法音寺と同じく避難所となっていた水産高校へ避難したそうです。避難の際、地震発生の際でAさんは津波が来ることを確信していたように、旦那さんと共に避難所へ向かおうとしたそうです。しかし旦那さんは船の様子を見て、海の方へ行ってしまったため、一人

死に逃げてきたと話していたそうです。また、避難所に来た人々の中には、自分の家が津波によって流されていくのを高台から見ている人もいたようです。そのような、やるせない思いを抱えている人を目の当たりにして、心が痛んだとおっしゃっていました。私はこれらの話を聞いてまず思ったことは、突然の災害にも関わらず、冷静かつ的確な判断を瞬時に下し、それによって避難をされているのだということです。特に津波に関しては、一度波が来た後の引き潮のことで考えてそれに巻き込まれないように高い場所へ避難されていたそうで、改めて自分の命を自分自身で守るということの大切さを感じてきました。

次に、避難中、そして現在の精神面についてもお話をしてくださいました。もうすぐ震災から8年が経とうとしている今、震災が実際よりも昔の出来事のように感じることがあるそうです。と言っても、全てのことを昔のことのように感じるといふ訳ではありません。石巻の人々は、東日本大震災が残っていた傷を大きな経験とし、防災や避難訓練を重んじ、私たちに伝えていただきました。私は、この法音寺での出会いと気持ちを忘れないように過ごしていきたいと思えます。

次に、避難中、そして現在の精神面についてもお話をしてくださいました。もうすぐ震災から8年が経とうとしている今、震災が実際よりも昔の出来事のように感じることがあるそうです。と言っても、全てのことを昔のことのように感じるといふ訳ではありません。石巻の人々は、東日本大震災が残っていた傷を大きな経験とし、防災や避難訓練を重んじ、私たちに伝えていただきました。私は、この法音寺での出会いと気持ちを忘れないように過ごしていきたいと思えます。



助「自助」「共助」の重要性をとても感じました。

ご住職さんに境内の高台からどのように津波が来たか、被害はどのようなものだったのかなど、現地を示しながら震災当時の様子についてご説明いただいた後に、法音寺の中で、実際に被災地の方々へのインタビューをさせていただきました。事前に考えた質問だけでなく、それらから派生して多くの貴重なお話を伺い、とても充実した時間を過ごすことができました。



りません。震災に関連した自分の中にある記憶に関して、昔のことのように感じる部分と現在に近いことのように感じる部分があり、不思議な感覚を感じるそうです。これはきっと、当事者にしか分からない感覚なのだろうと私は思いました。また、震災を経験したことで、何か特別なことがなくても、自分の家で普段通りに穏やかな生活を送ることができるといふこと、何気ない日常があることが一番幸せなのだと思うようになったとおっしゃっていました。

また、災害時に役立つ知識も教えていただきました。まず、避難時に持っていくべきものについてです。Aさんは、逃げる際に、飲料水と少量のお菓子を持って行ったそうです。このような実体験から、避難生活では水がとても大事になると教えていただきました。次は靴についてです。逃げる際に履く靴について、津波の恐れがある場合、水に浸かってしまっても歩けるようにと、長靴を履こうと

11月上旬から始まった hug work に私たち3年生の葛西ゼミ4名でボランティアとして参加している。今までは、サークルのボランティアで障害者と関わることが多く、大学で交流する機会がほぼなかった。また、hug workを大学で行うことで、障害者もこれまで習得された就労に関する技術を発揮できる場になっているのではないかと感じている。さらに、社会福祉学部だけではない他の学生も障害者と交流することができる機会になっていると感じる。「障害者を持つことができる」というところを



hug workの意義として商品が売れることにより利益が生じることほもちろんであるが、こうした活動を通して障害者や障害者雇用、障害者施設などに対する住民の理解が図られると共に地域に溶け込んでいく初めの一歩としてよい機会になっていると思う。地域の方々は、日常生活で障害者と接することが少ない。そのため、このように障害者(施設)と地域が関わりを持つ機会を今後増やすことにより、障害者に対するイメージが変わるのではないかと感じた。これらが定着することによって差別や偏見が徐々になくなり、「地域共生社会」の実現に役立つのではないかと、今後も継続していくことが重要だと考える。インクルージョンをひろめていくためにも、私たちが学生が障害者の支援に携わるこ

第七回就活祭に参加して

社会福祉学部 社会福祉学科三年 小野 みほ

「第七回就活祭」が行われた。今回の報告者の四年生の業種・職種は、多岐に渡った。

就職活動の準備として今までは、マイナビやリクナビの講座をはじめ、地元の事業所などから話を聞くということが多かったが、実際に四年生の先輩から話を聞くことは初めてだったため、新鮮な気持ちで臨むことが出来た。

私は、医療・福祉分野に就職を考えているため、主に医療・福祉分野に内定が決まっている四年生の先輩から話を聞いた。いつから就職活動を始めたのか、面接の雰囲気や質問はどのような事柄を聞かれたのかなどたくさん聞くことが出来た。そして、四年生の先輩が口を揃えて言っていたのが、「ありのままを話す」ということだった。練習しても本番では緊張するが、自分の考えをありのまま話すことで、相手側に気持ち伝わりやすくなる、アドバースをいただいた。また、早めにインターンシップに行ったり、



就職活動の準備として今までは、マイナビやリクナビの講座をはじめ、地元の事業所などから話を聞くということが多かったが、実際に四年生の先輩から話を聞くことは初めてだったため、新鮮な気持ちで臨むことが出来た。



事業所の見学に行ったりと就職したい業種を調べたり、雰囲気慣れしておくことも必要と教えていただいた。

hug workに参加して感じたこと

社会福祉学部 社会福祉学科 葛西ゼミ 小野みほ 葛西聖季 澤橋香月 高田沙哉香

11月上旬から始まった hug work に私たち3年生の葛西ゼミ4名でボランティアとして参加している。今までは、サークルのボランティアで障害者と関わることが多く、大学で交流する機会がほぼなかった。また、hug workを大学で行うことで、障害者もこれまで習得された就労に関する技術を発揮できる場になっているのではないかと感じている。さらに、社会福祉学部だけではない他の学生も障害者と交流することができる機会になっていると感じる。「障害者を持つことができる」というところを

hug workを通じて伝えることができていくと感じた。しかし、改善点も見られる。どうしても初対面だと緊張してしまい、障害者への関わりや接客と一緒に行動すること、障害者とコミュニケーションを取りたいと思うが、どのように接していいかわからないことだ。それが影響してしまい、沈黙が続いてしまったりもたつてしまう場面があった。障害者と一緒に来られる職員は、昨日のテレビのことや、障害者の好きなものを話題にしてコミュニケーションをとっていた。これを私たちが使うことが出来るのではないかと考えたため、これからのボランティアに活かしていきたい。

hug workの意義として商品が売れることにより利益が生じることほもちろんであるが、こうした活動を通して障害者や障害者雇用、障害者施設などに対する住民の理解が図られると共に地域に溶け込んでいく初めの一歩としてよい機会になっていると思う。地域の方々は、日常生活で障害者と接することが少ない。そのため、このように障害者(施設)と地域が関わりを持つ機会を今後増やすことにより、障害者に対するイメージが変わるのではないかと感じた。これらが定着することによって差別や偏見が徐々になくなり、「地域共生社会」の実現に役立つのではないかと、今後も継続していくことが重要だと考える。インクルージョンをひろめていくためにも、私たちが学生が障害者の支援に携わるこ

卒業論文を終えて

文学部 英語・英米文学科四年 西村 和晃



私は、「英語のリスニングにおける『音のつながり』を聞き取ることの重要性」というテーマを定めて卒業論文に取り組んだ。日本人英語学習者はリスニングにおいて、「音がつながって聞こえる部分」の聞き取りが苦手であることが分かっている。しかし、「音のつながり」は具体的に何を指すのか疑問を持ったため、このようなテーマを定めた。

卒業論文と同時に進行で行われるのが、就職活動である。私は教員志望の為、教員採用試験に向けた勉強と並行しながら卒業論文に関する研究を進めた。試験が実施される七月から九月末までは、どうしても研究を進め

ることが困難であった。しかし、時間を見つけては図書館で文献を探すことや、インターネットで自分の研究に関係のある論文を探すことを心掛けた。見つけた文献は何度も読み込む必要があるが、試験期間中はとにかく参考文献を集めることだけに集中した。

卒業論文を終えて

文学部 日本語・日本文学科四年 青木明日香



卒業論文を書くにあたって、一年生の頃には、昔から好きだった長野まゆみについての論文を書くこと決めていた。そこからテーマを絞り、長野の作品には夏を舞台にしたものが多いという点に着目し、『少年と夏』について執筆するに至った。

テーマはすぐに決まったものの、執筆は想像以上に困難で

卒業研究を終えて

看護学部 看護学科四年 大森 未来

9月29日(土)、看護学部の卒業研究発表会が行なわれました。この日の発表のために私たちが看護学部の4年生は、担当教員と共に、病院実習、就職活動、国家試験対策のための学習などと並行しながら卒業研究を進めてきました。

私は、「高齢者の生きがいに関する調査」というテーマで研究を進めてきました。平成28年の日本の高齢化率は27.3%であり、高齢化率は今後も上昇していくことが予想されています。高齢社会では、介護や医療負担といった問題ばかりではなく高齢者の健康問題、なかでも「健康寿命」が重要視されていること、そして、健康

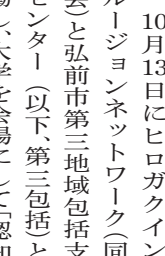
寿命に生きがいや幸福感が影響していることを知りました。そこで私は、「生きがい」や「幸福感」に着目し、高齢者が生活の中で幸福感を持つて生活することができるといえるようにするためにどのような支援が必要であるかを検討したいと思ひ、このようなテーマにしました。

私は調査方法をインタビューとしたので、研究に協力してくれる対象者を募るにはどうしたらよいか、質問内容をどうするかなど、インタビュー実施前の段階で考えることが山積みで悩むことが多々ありました。研究を進める手が止まってしまう

ことや、家族が応援してくれたことは、とても気持ちの支えとなった。そして、日々指導教員である井上先生からご指導を受け、最終的に自分なりの見解を示すことが出来て非常に安心した。このテーマで書き終えることが出来たのは、自分の中で大きな財産となったと感じる。大学生活の学びの集大成である卒業論文は、論文自体は自分で1人で書き上げなくてはならないものだが、周りの方々の協力なしでは絶対に完成できないものだと心から感じた。相談に乗ってくれた友人や支えてくれた家族、そして井上先生には感謝の気持ちで一杯である。

「認知症徘徊模擬訓練を終えて」

ヒロガクインクルージョンネットワーク 社会福祉学部 社会福祉学科三年 工藤 桜佳



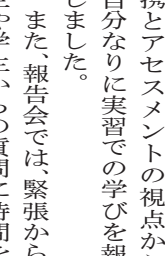
10月13日にヒロガクインクルージョンネットワーク(同好会)と弘前市第三地域包括支援センター(以下、第三包括)と協働し、大学を会場にして「認知症サポーター養成講座(以下、養成講座)」と「認知症徘徊模擬訓練(以下、模擬訓練)」を行いました。学生と第三包括の方々と一緒に計画から話し合い、パンフレット作成や日程調整、学生へ

の声をかけ等役割分担をし、包括の方と打ち合わせを重ね本番を迎えました。

当日は、まず養成講座を受講し、認知症についての理解や支援について座学で学んだ上で模擬訓練を行いました。模擬訓練では、養成講座で学んだ「見る」「話す」「触れる」の3つのポイントを意識し、行先まで一緒に歩くことや地域包括支援セン

ターや警察など関係機関につなぐことを意識して声掛けを行いました。模擬訓練では、認知症の方に理解してもらえらる会話、関係機関を紹介するタイミング、つきそい方などに苦慮しました。体験をおして、認知症の方が抱える不安な気持ちや1人1人に合った安心感につながる声掛けを意識し、実際に地域において困っている方を見つけたら勇気を出して声をかけてみたいという気持ちになりました。

判断能力に課題を抱える人が住みやすい地域、地域共生社会の実現に向け社会福祉を学ぶ学生だけではなく、地域の方が認知症について正しい知識を持ち、適切な関わりができる地域を作ることが大切であると感じました。今後は、講座やイベントを受講するだけでなく、第三包括の方々や地域の方々と一緒に、地域生活課題を共有し、課題の解決にむけて主体的に取り組んでいきたいと思ひます。



徘徊模擬訓練

は、これまで何度も繰り返しきた報告内容を伝えられたことに安心しました。今回の報告会は、今後社会に出た時にも活かせるよう学んだことを相手に伝えるようにまとめることや臨機応変に対応することなどを経験する良い機会となったと思ひます。

この経験を踏まえて、来年度

社会福祉実習体験報告会を終えて

社会福祉学部 社会福祉学科三年 澤橋 香月



本年度は、2018年11月10日、例年よりも1か月ほど早い日程で社会福祉実習体験報告会を行いました。私は八戸市社会福祉協議会で実習を行いました。実習課題を少子高齢化がすすみ家族や地域社会の力が弱

まっていることを背景に、多様

なこともありましたが、そのような時、自身の研究の目的を振り返ったり、担当教員から意見をもらったりすることで研究方法を明確にしていくことができました。そして、対象者にアポイントメントを取り、直接お話を聞くことができました。インタビューの難しさを感じながらも、貴重なお話をばかりで大変勉強になりました。

卒業研究発表会では、数カ月間研究してきた学びを7分という時間の中で発表しました。関心のある内容を深く学ぶことのできる楽しさや長期間に渡り継続して課題に取り組むことの大変さ、限られた時間の中で要点をまとめることの難しさ、そして研究が終了した時の達成感など貴重な体験ができたと思ひます。これらの学びや経験を今後、臨床で勤務する際にも役立てていきたいと思ひます。

卒業研究を無事に終えました。が、いよいよ2月中旬にある国家試験が迫ってきているので合格して本学を卒業できるように努めたいと思ひます。

セスの3点について、多職種連携とアセスメントの視点から自分なりに実習での学びを報告しました。

また、報告会では、緊張から先生や学生からの質問に時間をかけ過ぎて答えきれなかったり、質問を聞き返してしまったりと思うように答えられず悔しい思ひをし、自分の言葉で考えていることを伝える難しさを痛感しました。いただいた質問については、報告しただけで終わるのではなく、事後学習で補うことにより、さらに学びを深めたいと思ひています。報告会終了後

実習報告会では、①八戸市における地域特性の理解把握を通しての地域生活課題について、②社会福祉協議会の地域福祉における役割、③社会福祉協議会でのソーシャルワークプロ

セスの3点について、多職種連携とアセスメントの視点から自分なりに実習での学びを報告しました。